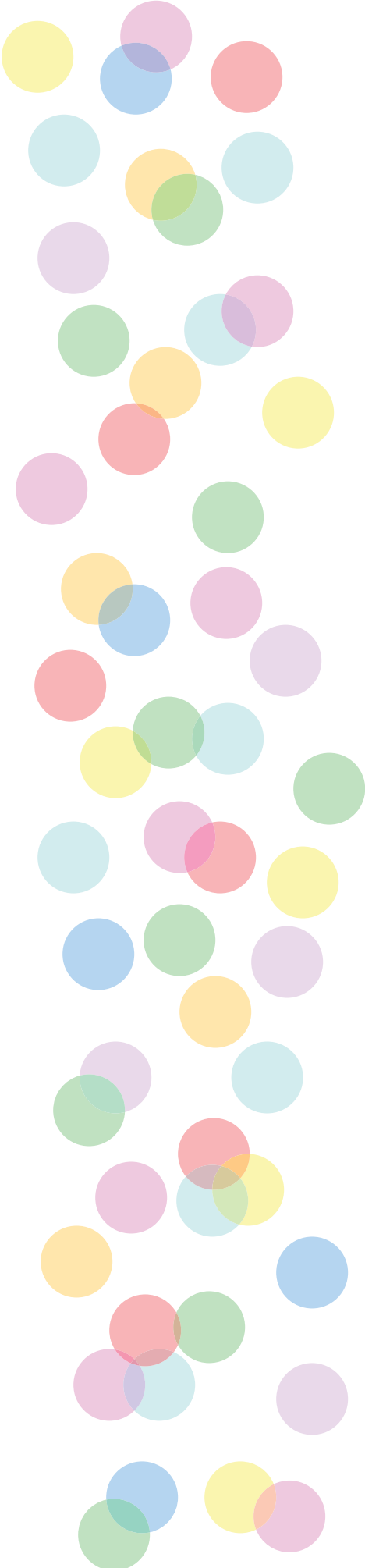


SAN AC 燦

リフレクティブ 共創 データブックⅡ





目次

01 学生 FD スタッフ AC 燦

02 データブックの使い方

03 京産共創プロジェクト

04 京産共創プロジェクトⅢ

10 燦の豆知識-1

12 グローバル・サイエンス・セミナー

16 燦の豆知識-2

18 分科会（学生 FD サミット 2013 夏 in 立命館）

22 京都産業大学データ

24 YouTube「燦.ch」

25 SUN ちゃんプロフィール

26 最後に

学生 FD スタッフ AC 燦



ここでは AC 燦をご存知でない方に向けて、概要を紹介する。

学生 FD スタッフ AC 燦とは？

組織名称	学生 FD スタッフ AC 燦		
FDとは	Faculty Development の略 大学の授業改善・教育改善のための組織的取組		
ACとは	Academe Co-Creating Committee(大学共創委員会)の略 大学を共に創っていこうという目標を掲げている		
燦の由来	「京都産業大学で燦々と輝き続ける団体でありたい、京都産業大学がより明るく光り輝く大学になってほしい。」という願いから命名		
活動内容	主に学内外における学生・教員・職員の三者で話し合う場の提供に力を入れており、他大学交流も積極的に行っている		
結成時期	2011 年 6 月 27 日		
メンバー数	7 学部 30 名(2014 年 5 月現在)		
大学との関係	学長室(教育支援研究開発担当)との連携		
活動理念	「アホなことを真剣に、マジメなことを楽しく。」		
スローガン	「Academe Co-Creation 大学共創」		
最終目的	「京都産業大学を構成するもの全て、 また全国の大学を構成するもの全てを『笑顔』にすること。」		



データブックの使い方



本データブックでは、2013 年度に燦が開催したイベントをピックアップし、内容や結果などを記述する。

データブックを作ったきっかけ

AC 燦が誕生して 2014 年 6 月で 3 周年。その間に多くのイベントを企画から運営まで全て学生主体で行い、他大学交流などの活動を通して幅広く情報を収集してきた。

イベントを続ける上で、これまでに実施したイベントとの連続性を保ち、**これまでの議論を無駄にせず積み上げるための工夫の必要性**を感じ、データブックを作成するに至った。データブックは、「振り返りのデータブック」として、**これまでのイベントの概要と得られた意見、論点をデータで簡単に振り返ることができる**。

また、イベント参加者に対する成果報告の一つとしても位置付けており、参加者の生の声をできるだけ多く掲載しているところに注目して読んでいただきたい。

データブックのポイント



全てを
学生が実施

イベントの企画や事前調査(実施前のヒアリングなど)、当日の運営、事後データ分析など、全てを学生が実施する。

調査票
による
データ分析

調査票(アンケート)を作成し、調査結果である数値データや自由記述、意見の分析を行う。

分析結果
の学内外
への発信

イベントを実施するだけで満足することなく、分析結果を学内外へ発信する。

京産共創プロジェクト



「京都産業大学をもっとよくしたい！」そのような思いから燦の活動が始まり、今年で燦が結成されて3周年を迎える。ここでは2013年2月に発行したデータブックに掲載された京産共創プロジェクト第1弾とⅡを振り返る。

京産共創プロジェクト第1弾

テーマ

「京都産業大学をどう創っていくか」を念頭において三者が共に話しやすいように各グループでテーマを設定した。

概要

普段は交流することの少ない学生・教員・職員が集まって、テーマに沿って意見交換を行うイベントである。当日は学生58名、教員17名、職員29名の計104名が参加した。

目的

- ①学生・教員・職員の三者が立場を超えて意見交換ができる場を提供する
- ②三者が協力してより良い京都産業大学を創っていくための契機とする
- ③それぞれが考える問題の所在や大学の方向性を明らかにし、今後の活動内容を検討する



京産共創プロジェクトⅡ

テーマ

「元気な学生が多い原動力は?」「ワンキャンパスを活かすためには?」「好きな授業、人に勧めたい授業とは?」の3つのテーマを設定した。

概要

第1弾で挙がった意見やアンケートをもとに具体的なテーマを設定したことにより、第1弾よりも深い議論展開となるように目指した。当日は学生59名、教員10名、職員20名の計89名が参加した。



京産共創プロジェクトには、
「京都産業大学を学生・教員・職員
みんなで協力して創っていこう。」
という思いが込められているよ。



燦(SAN) presents

「京産共創」プロジェクトⅢ

「僕らが創る新たな絆」

第3弾となる今回は学生・教員・職員の立場から考え方の違い(ギャップ)を知り、三者の絆を深められるようなイベントの企画・運営を行った。当日は学生90名、教員22名、職員27名、外部1名の計140名が参加し、活発な意見交換が行われた。ここではイベントの内容を振り返る。



燦の活動の原点である「京産共創」プロジェクト

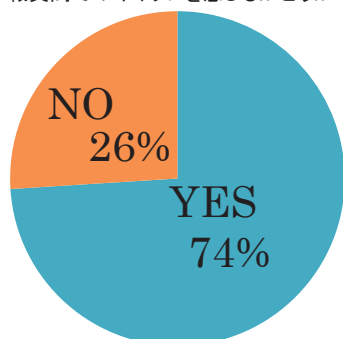
11/26(火) in 京都産業大学 雄飛館 2・3階 ラーニングコモンズ

「京産共創」プロジェクトⅢのテーマ設定

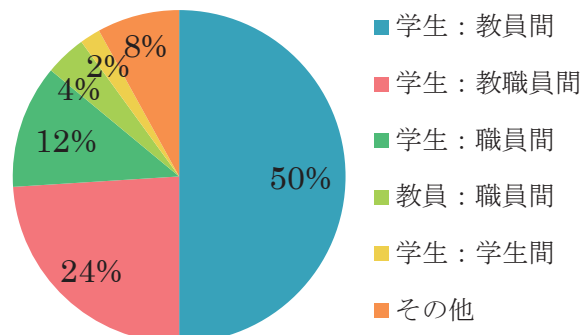
「京産共創」Ⅲでは、イベント実施前のギャップ意識の調査(N=50)や過去のイベントの振り返りを行い、テーマを設定した。以下では、調査結果と設定したテーマについて記述する。

① ギャップ意識の調査

授業や大学生活において学生・教員・職員間でのギャップを感じるかどうか



② YESと答えた内訳



ギャップ意識調査の実施

大学1～4年生の50名を対象に授業や大学生活において①学生・教員・職員間でのギャップ意識の調査、②ギャップ意識のある学生のうちギャップを感じる対象について、イベント前に調査を行った。

①については、ギャップをYES(感じる)/NO(感じない・わからない)で回答し、②については、学生・教員・職員の中でギャップを感じている組み合わせを選択して回答する形式であった。

①では多くの学生がギャップを感じる一方、ギャップを感じない・わからないと回答している層は全体の3割近くを占めており、イベント開催にあたり学生・教職員間でのギャップを感じている層だけではなく、普段はギャップについてあまり関心のない層にも参加したいと思えるような工夫が必要であると考えた。

そこで、大学生活において欠かすことのできない「単位」と「時間」に注目し、次の2つのテーマを設定した。それぞれの議論の中で学生・教員・職員の絆を深めることができるようなグループワーク(以下「しゃべり場」と呼ぶ)を展開した。

テーマの特徴

「もし単位がなければ、どのような授業を受けるのか？」

学生にとって単位は授業を選ぶ際の基準の1つである。授業をどのように選択し、どのように自分の学びに繋げるかは学生の自由である。本テーマでは「単位」という概念が無くなったときに「どのような授業に価値を見出すのか?」「授業本来の魅力とは何なのか?」という点に注目して理想の授業や質の高い大学での学びを実現させるヒントを探る機会とする。

「人生における大学生生活の4年間とは？」

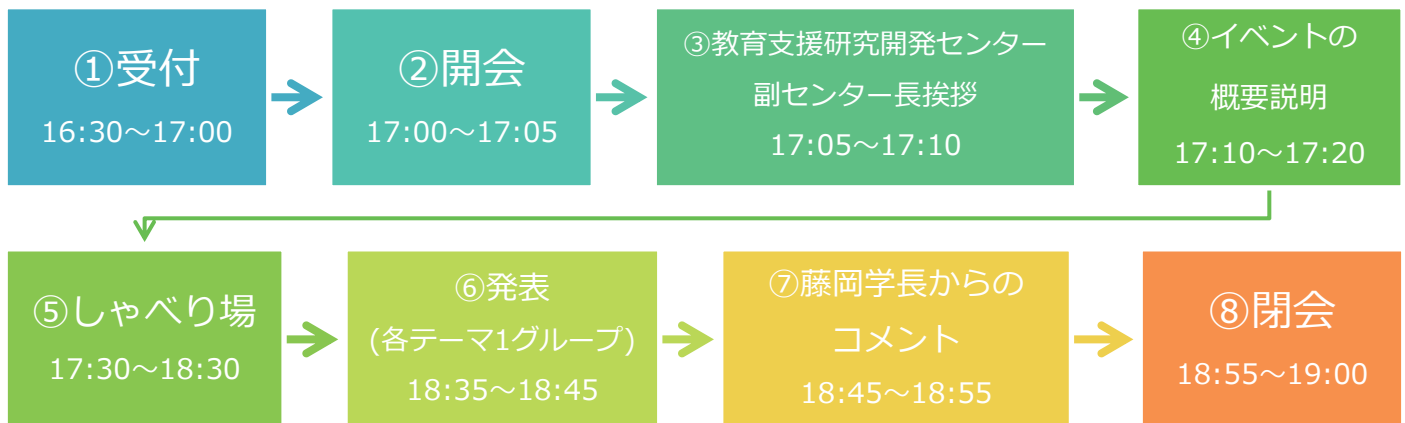
大学は学生・教員・職員で構成されている。しかし、『自由』に満ち溢れている大学生活を謳歌できるのは、学生だけである。勉学、課外活動、アルバイトや恋愛に没頭するなど、充実した大学生活を送る学生の中には、なんとなく大学に入学した学生もいる。本テーマでは「大学生活という時間をどのように過ごすか」を、実際に大学生活を送っている学生と、学生生活を経験している教職員が共に議論することで大学生生活のあり方を見つけていく。

本イベントの目標

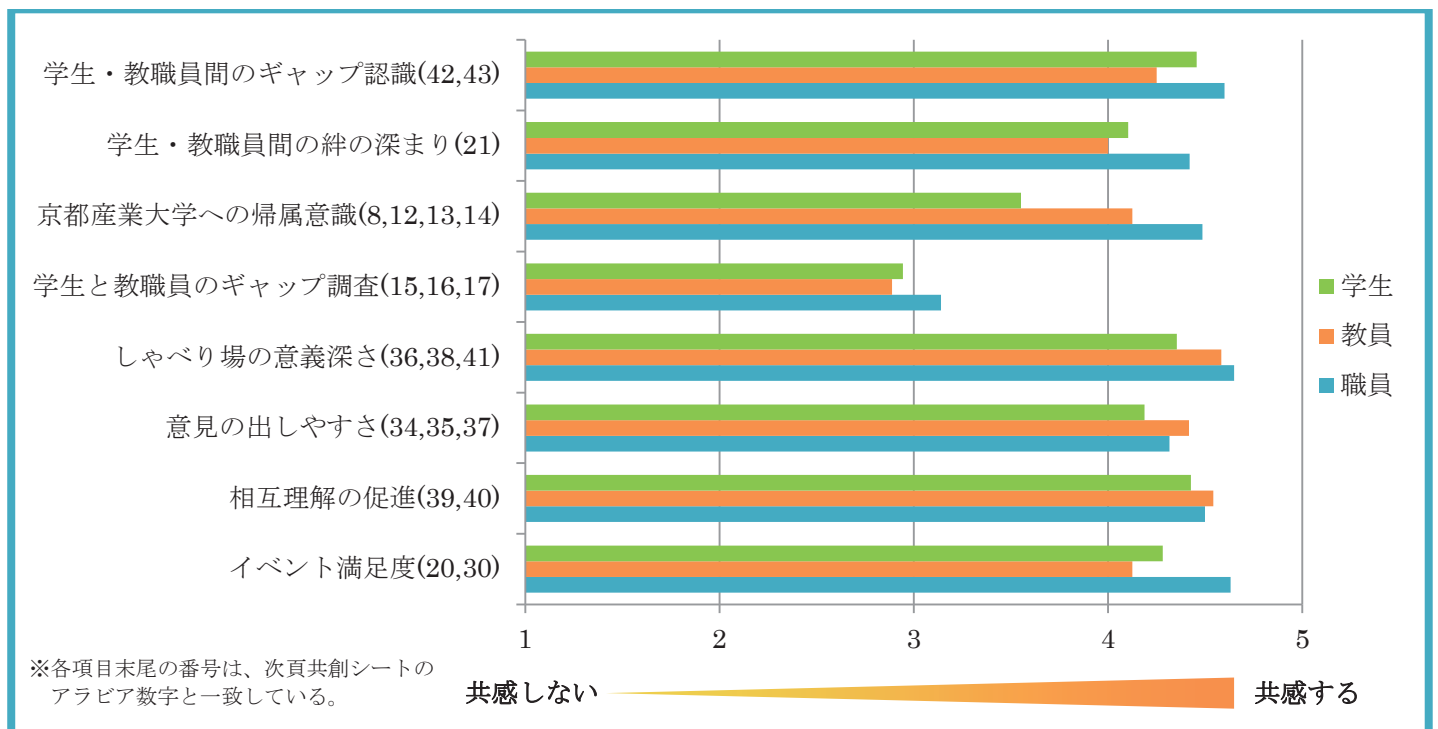
学生・教員・職員の立場に関係なくお互いの意思を表明する場を提供し、三者が共通のテーマについて話し合うことで相互理解(ギャップの認識)を深め、お互いが協力し合える関係(絆)を築き上げることが目標である。



当日のタイムスケジュール



グラフの考察



本イベントでの特徴的な質問項目について、上記グラフとしてまとめた。

グラフより、参加者は学生・教職員間にギャップがあると認識していたが、イベントを通して三者の相互理解が促進されたことが観察される。以上から、学生・教職員間のギャップは縮まったと考えられる。

また、本イベントの参加者は、例年通り本学における帰属意識が高いものの、以前より低い数値であり、参加者層に広がりが出てきたと言える。加えて、学生・教員・職員に対してあまり不満を持っていないことも特徴である。

イベント全体としての満足度は高く、本イベントの特徴であるしゃべり場に関しても高い評価を得ることができた。



京産共創プロジェクトⅢ 共創シート

学生・教員・職員別共創シート結果の一覧（学生 N=48, 教員 N=12, 職員 N=20）

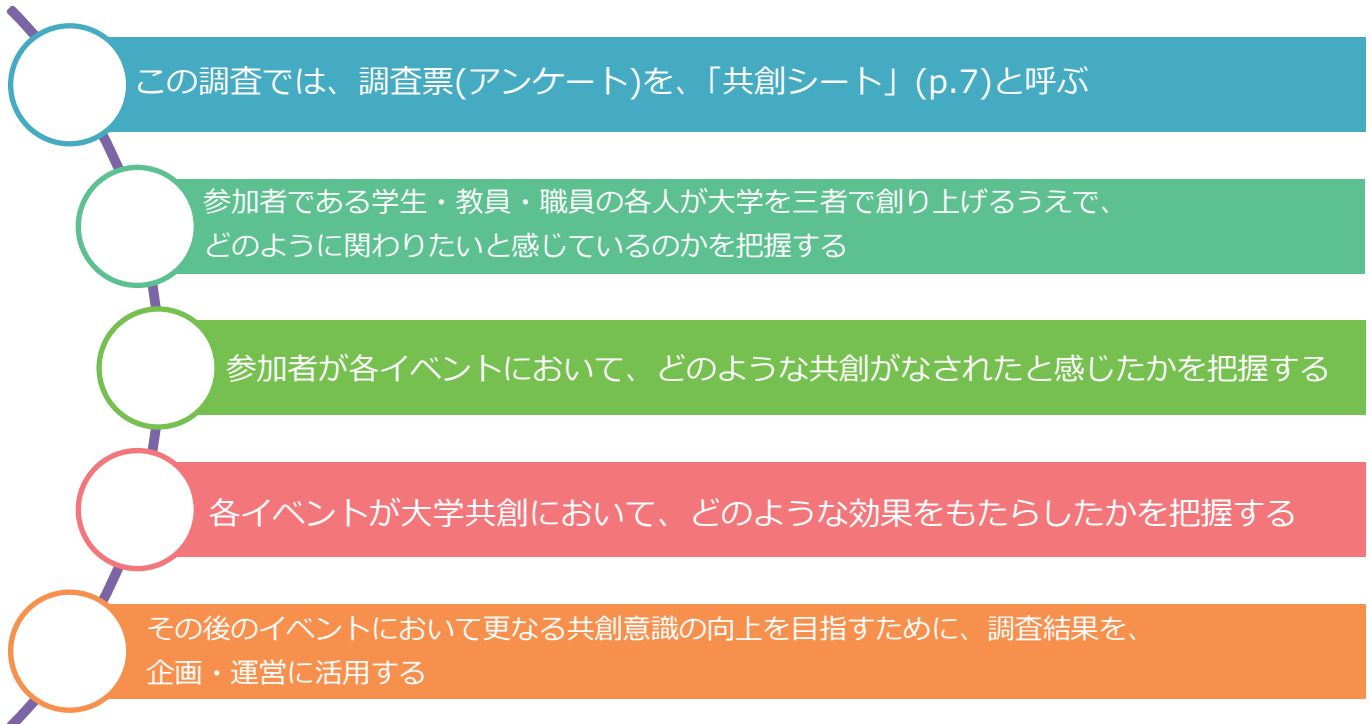
I. 回答者属性調査	学生	教員	職員
I-I. 産大帰属意識	3.55	4.13	4.49
8 京都産業大学が好きだ	4.04	4.42	4.47
12 京都産業大学の学生が好きだ	3.29	4.33	4.58
13 京都産業大学の教員が好きだ	3.44	3.75	4.47
14 京都産業大学の職員が好きだ	3.44	4.00	4.42
I-II. しゃべり場適応度	3.49	3.17	3.87
3 初対面の人と話すのが好きだ(学生の頃好きだった)	3.46	2.92	3.95
2 自分は積極的に自己表現するほうだ	3.52	3.42	3.79
I-III. 大学運営モチベーション	3.49	4.13	4.39
1 以前から大学に関してもにかしたいと思っていた	3.63	4.25	4.74
11 京都産業大学に貢献するのは京都産業大学の構成員の義務だと思う	3.35	4.00	4.05
I-IV. 正課活動における充実度	3.97	3.96	3.99
6 授業で学ぶのが好きだ(学生の頃好きだった)	3.65	3.50	3.37
7 好きな授業・先輩に勧めたい授業が、京都産業大学には1つ以上ある	4.29	4.42	4.61
I-V. 課外活動における充実度	3.56	3.63	3.79
4 クラブ・サークル活動で自分は充実している(学生の頃充実していた)	3.65	3.33	3.68
5 クラブ・サークル活動以外の課外活動で自分は充実している(学生の頃充実していた)	3.48	3.92	3.89
I-VI. 人間関係に関する充実度	3.11	3.46	3.55
9 他人と関わりを持つことが苦手だ*	3.42	3.08	3.68
10 教職員(学生)と話す機会が多い	2.81	3.83	3.42
I-VII. 学生と教職員のギャップ調査	2.94	2.89	3.14
15 京都産業大学の教員に対し不満を持っている	3.00	3.08	3.16
16 京都産業大学の職員に対し不満を持っている	2.85	2.67	3.26
17 京都産業大学の学生に対し不満を持っている	2.98	2.92	3.00
II. イベント全体での共感度調査	学生	教員	職員
II-I. 場を楽しむ	4.36	4.42	4.58
19 全体を通してイベントを楽しめた	4.33	4.50	4.53
22 参加した甲斐があったと思う	4.40	4.33	4.63
II-II. 参加者同士の交流	4.32	4.43	4.58
18 イベントを通じて参加者と親しくなることができた	4.17	4.50	4.37
31 教職員(学生)と話すよい機会だった	4.48	4.36	4.80
III-III. テーマの意義	4.08	3.90	4.43
27 「もし単位がなければ、どのような授業を受けるのか?」というテーマ設定は、学生と教職員の思いのギャップを知ることに役立った	4.08	3.70	4.37
28 「人生における大学生活の4年間とは?」というテーマ設定は、学生と教職員の思いのギャップを知ることに役立った	4.05	4.00	4.50
21 学生と教職員間の絆が深まったと思う	4.10	4.00	4.42
III-IV. イベント概要	3.95	3.94	4.07
24 雄飛館ラーニングコモンズ(本会場)での開催がよかった	4.40	4.67	4.84
25 開催時期は丁度良かった	4.09	4.00	4.11
26 イベント全体の時間は長かった*	3.38	3.17	3.26
III-V. イベント満足度	4.28	4.13	4.63
20 イベントを通じて今後、大学での生活に生かせるものがあった	4.17	4.08	4.47
30 他の人の意見を聞くことで新たな発見があった	4.40	4.17	4.79
III-VI. 燦の運営の適切さ	4.31	4.29	4.42
29 イベントの説明がわかりやすかった	4.30	4.08	4.37
23 燦のスタッフの対応に概ね満足している	4.31	4.50	4.47
III-しゃべり場での共感度調査	学生	教員	職員
III-I. もっと話したい	3.66	3.54	3.66
32 しゃべり場は、時間が短く、もの足りなかった	3.31	2.83	3.37
33 しゃべり場は、時間が長すぎ、途中で飽きてしまった*	4.00	4.25	3.95
III-II. 意見の出しやすさ	4.19	4.42	4.32
34 しゃべり場では、自分はリラックスして意見を言うことができた	4.13	4.25	4.10
35 しゃべり場で、グループの参加者は概ね自由に発言できていたと思う	3.85	4.18	4.20
37 しゃべり場で、意見を否定されることがあった*	4.58	4.82	4.65
III-III. しゃべり場の意義深さ	4.35	4.58	4.65
36 しゃべり場には、意義を感じない*	4.19	4.75	4.60
38 しゃべり場で、学生・教員・職員でしゃべってみてよかった	4.52	4.25	4.55
41 しゃべり場では、なんの気付きも得られなかった*	4.35	4.75	4.80
III-IV. 相互理解の促進	4.43	4.54	4.50
39 しゃべり場では、私の言いたいことは誰にも伝わらなかった*	4.35	4.50	4.55
40 しゃべり場で、周囲の人々は互いの意見に耳を傾けていた	4.50	4.58	4.45
IV. テーマに関する共感度調査	学生	教員	職員
IV-I. 学生と教職間のギャップ認識	4.46	4.25	4.60
42 教職員(教職員の方は「学生」)の意見は興味深かった	4.53	4.33	4.65
43 教職員(学生)が考えていることがイベント前よりわかった	4.38	4.17	4.55
IV-II. (もし単)理想の授業についての満足度			
45 しゃべり場や全体発表で共有した理想の授業についての意見はおもしろかった	4.13	4.00	4.26
IV-III. (人生)時間の使い方についての満足度			
44 しゃべり場や全体発表で共有したことで明日からの生活に変化があると思った	3.90	3.92	4.10
V. 単位と教育内容の相互関係について	学生	教員	職員
V-I. 単位の重要性について	3.64	3.95	4.16
46 (学生の方)授業で得られる知識の内容は、単位を揃えて卒業することより重要だ	3.75		
47 (教職員の方)受講生の能力/人間性を一定水準以上にするには、単位を与え、無事に卒業させることより重要だ		3.91	3.95
V-II. 意欲の差による影響	4.06	4.14	4.15
48 意欲の高い学生のモチベーションを、単位目当ての学生が下げてしまうことは問題だ	4.21	4.18	3.85
49 本イベントに参加し、より教育内容を重視すべきだと思うようになった	3.91	4.09	4.45

※表中、最も左の列のアラビア数字は設問番号(掲載順に付与)を示しています。
 ※数値は、各項目の平均値であり、4.00 以上をゴシックで、4.50 以上をマーカーで示しています。
 ※設問末尾に*が付与されている項目は、反転項目です。



データブックを初めて見る方へ：共創シートとは？

イベントを実施する際に、参加した学生・教員・職員を対象とした共創意識の調査を行っている。
共創シートはその調査票の一つである。
この調査には、次のような特色がある。



共創シートでは、各設問を「共感する」「どちらかという共感する」「どちらでもない」「どちらかという共感しない」「共感しない」の5段階で評価する形式をとっている。

- 共創シートの良いところは、以下の2点だよ。
- ・例年、継続して設けている質問項目があるため、比較できること。
 - ・分析結果を一覧の表にまとめることで、イベントを通して共創意識が高まったか一目で確認できること。



燦マスコットキャラクター
「SUN ちゃん」

もし単位がなければ
どのような授業を受けるのか？

人生における
大学生活の4年間とは？

意見詳細

魅力的な授業形式

「フィールドワーク」「グループワーク」
「双方向型授業」「自己発見のような能動的な授業」

教員の人柄

「教員の方の体験談が聞ける」「先生が面白い」
「学生をやる気にさせる」「各業界人の講演」

共通の関心を持つ仲間

「友達が出来る授業」「他大学の人と交流できる授業」
「社交性を高める場としての魅力」「出会い」

興味のある内容

「専門的な知識の追求」「感受性・センスを養える」
「未知のことを知る」「好きな分野を深く学ぶ」
「ここでしか受けられない授業」
「人生の話・豆知識が聞ける授業」

自分磨き

「素振り100回」「自分で調べる方法が身に付く」
「ゼミ」「プレゼン」「“経験”を吸収できる場」
「自分の将来に必要なスキルを得られる」「資格」
「新たな価値観に出会う場」「社会で身につく力」

社会で自立できるスキル

「生きる力」「考える力」「実行する力」

チャレンジと失敗

「熱中」「冒険」「試行錯誤」「挑戦」

何でもいいのでナンバー1

「ディベート優勝」「なにかのおたくになってみる」
「英語マスター」「無遅刻無欠席」

人生の方針決定

「人生の夢を探す」「失敗者の経験を聞く」「起業」
「一人旅」「バックパッカー」「楽しめ楽しむ」

心を豊かにする仲間との出会い

「人生で一番大切な友達を作る」「人とのつながり」
「色々な年代の人と関わりたい」

大学生だからこそ出来ること

「先生を利用できる」「ド根性ラーメン完食」
「大恋愛（大失恋）」「夜遅くまで友達と話をする」
「学内で肝試し」「下宿仲間で毎日飲み会」
「学生祭典立ち上げ」

まとめ

本テーマでは、**学生と教職員が様々な側面から授業に魅力を感じていることが観察された。授業は自分の興味や学部の専門性を深める場**であるという認識に加えて、**人生における経験の一つ**として捉えていることも確認できる。

学生は知識を蓄積するだけではなく、授業の中で自ら**主体的に考え行動する過程を経験し、授業で習得した知識やスキルを違う場面で活用したい**と考え、教職員はそのような学習環境の中で成長してほしいと考えている傾向が見られた。**教員と職員は連携して学生が経験的な学習をすることのできる空間や学生と教員は相互に影響し合える関係性を築くことにも留意する必要がある**だろう。

授業において重視することとして「将来の夢への準備」「自分の将来の方向性を定めたい」「人生において大切なものを教えてくれる授業」といった意見もあり、**学生の教職員や大学に向けた期待、自らの成長に対する向上心を垣間見ることができる。**

本テーマでは、大学生活において重視されることとして、**社会に出て役に立つ実践的なスキルの習得や学内外での授業・人・経験による学びの機会を得ること**が挙げられた。自由な時間を**将来への投資**として活用する、大学の中で多方面から集まる学生と交流して**人脈を広げる、後先考えることなくやりたいことをやりたいだけやる**。このような**様々な場面でのチャレンジや失敗、幅広い知識の吸収、興味関心に任せた主体的な行動**など、大学生活の中で成し遂げたいことが挙げられている。

本学では、「サギタリウス・チャレンジ[※]」など、学生の主体的な挑戦を資金的にも支援する取り組みがあるが、**学生による挑戦をより一層支援・促進する必要性**を感じることができる。

共創シートの自由記述では、参加学生からは「**教員の方との交流というあまりない機会が得られた**」、「**今後も引き続きこのようなイベントを開催してほしい**」、教職員からは「**有意義な時間となった**」など、学生スタッフの運営に対する好評価が得られた。

※サギタリウス・チャレンジ…果敢に挑戦する学生をサポートする本学の取組。





KYOTO SANGYO UNIV. 

燦の twitter 兼、
爽やか担当。

※燦の twitter とは？
公式アカウント：@KSU_gakuseiFD





キープ力は、
誰にも負けない。
必殺乙倉ループ。

※必殺乙倉ループとは？
乙倉氏が一度入ったら
なかなか抜けられない思
考回路のループのこと
である。

今ではクオリティを保
つのに欠かせない要素と
なっている。

KYOTO SANGYO UNIV.



「私のグローバル化とは？」

『京産共創』プロジェクトⅢ ～僕らが創る新たな絆～」がきっかけとなり、学生の持つ「グローバル」のイメージや意見をそのまま引き出してほしいとのことから、本学の「グローバル人材育成推進事業」によるグローバル・サイエンス・セミナーにてワークショップへの協力が依頼された。当日は学生 18 名、教員 9 名、職員 9 名の計 36 名が参加した。ここでは、グループワーク(しゃべり場)を中心に作り上げた「グローバル」を題材にしたイベントについて、具体的な内容を記述する。



2014 グローバル・サイエンス・セミナー 学生によるワークショップ

3/7(金) in 京都産業大学 雄飛館 2階 パフォーミングスペース

第 1 部 「グローバル化のイメージ」

グローバルとは、最近よく耳にする言葉である。グローバル人材、グローバルな視点というようなキーワードが使われ、教員や職員を中心にカリキュラム・環境作りが進められている。では実際、京都産業大学の学生・教員・職員はそれぞれグローバルという言葉やグローバル化に対してどのようなイメージを持っているのだろうか。

そこで、ワークショップの第 1 部では、学生・教員・職員の三者で構成される 5~6 人のグループに分かれ、グローバルのイメージについて話し合った。



～グループワークで挙げられたグローバルのイメージ～

料理

ファッション

宗教

本物のマテ茶がほしくなること

アート

ネットワーク

SNS

食

音楽

つながり

マクドナルド

文化

ビジネス

世界・地球が小さくなる

iPhone

企業

英語

地球人

海外へ行きやすくなる

マンチTスターU VS チトルシー

グローバルって何だろう？

おもしろそう

田中マ一君、香川選手…etc

小野妹子

遠くて近い、近くて遠い

言葉の力をのりこえ本質的なもの

競争

宇宙、でかい、まるい

サラダボール

戦争が無くなる

天国

疲れる

海

こわい

地獄

※文字の大きさは意見データの出現頻度や相関関係などを解析するテキストデータ分析手法に基づくものではありません。



第2部「グローバルで大学をワクワクさせるためには？」

第2部では、第1部「グローバル化のイメージ」で共有した意見を活かした上で、「グローバルを学生にとって身近なものにしたい」という思いからテーマを設定した。第1部でのグループ構成を継続することで信頼関係が構築され、深い議論を生み出すことができた。

～グローバルで京都産業大学をワクワクさせるためのアイデア～

- ・ ジョークを用意する
- ・ ルー語でOK
- ・ 留学する、海外へ行きたい
- ・ 興味を持ってもらう！！
- ・ 言葉のカベをのりこえ本質的なもの
- ・ SNS
- ・ 究極のグローバル化は平和
- ・ 意見を尊重できること
- ・ ホンモノを体験する

Action



Event

- ・ グローバル大賞
- ・ 夢は海外キャンパス、
現実にはキャンパスワイド祭り
- ・ 学食で世界各国の料理
- ・ 料理やお菓子を使ってグローバル祭
- ・ アンチグローバルスピーチ大会
- ・ コスプレ大会、世界空耳アワー、
ストリートビューツアー
- ・ 京産大グローバルグッズの開発



- ・ 文系理系の考え方の違いを利用した
留学カリキュラムの構成
- ・ OPEN MIND な人材を育成する大学
- ・ 日本のいいところを学べる授業
- ・ 授業科目のグローバル度チェック
- ・ 文書の英語併記化
- ・ 多読
- ・ 外国語のカリキュラム強化
- ・ いろんな言語をかじれるセミナー

Education



まとめ

第1部「グローバル化のイメージ」では、多様なグローバルのイメージが明らかになった。例えば、「海」、「宇宙」というような漠然としたものから、「こわい」、「疲れる」などのネガティブなイメージ、「食」、「アート」、「スポーツ」などの文化的側面、「YouTube」、「Facebook」、「iPhone」などの情報ネットワークに関連した話題などが挙げられた。

第2部「グローバルで大学をワクワクさせるためには？」では、第1部の議論をベースにして深い話し合いが行われた。第2部でピックアップしたアイデア(p.14)では、行動につながるような姿勢、グローバルに注目したイベント開催や教育事業の展開などが挙げられた。

最後に参加者全員に「私にとってのグローバル化とは？」という質問に回答していただいた。その内容を以下にまとめて掲載する。



私にとってのグローバル化とは？





KYOTO SANGYO UNIV. 燦

※癒しパワーとは？
空気が重いミーティング
の時も、どんなに疲れて
いても、リケジョの笑顔に
癒されます。

可愛いリケジョ。
癒しパワー放出中。



KYOTO SANGYO UNIV. 燦

見た目はマジメ、
頭脳はファンタジー、
心はメルヘン。



2013 年 8 月 25 日(日)に立命館大学で行われた学生 FD サミット 2013 夏で分科会Ⅱ「それでも僕は考えたい 学生 FD の『思い』」を実施し、学生 71 名、教員 3 名、職員 6 名の計 80 名(アンケート記入者数)が参加した。ここでは、イベント運営で考慮した特徴および具体的な実施内容を記述する。

※学生 FD サミット・・・2009 年夏から継続して開催されている大学教育の改善について全国の学生・教員・職員が一体となって取り組むイベントである。

「それでも僕は考えたい」

学生FDの『思い』



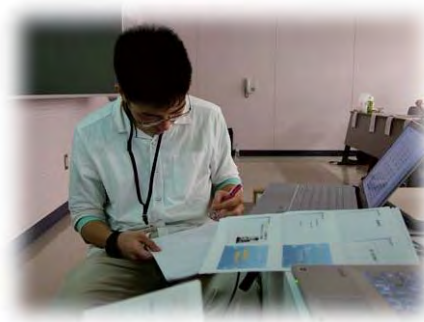
学生 FD サミット 2013 夏 分科会Ⅱ

8/25(日) in 立命館大学 衣笠キャンパス

このテーマに至った経緯

燦がこれまで成功や失敗を重ねてきた学生 FD 活動には「FD はよくわからないけれど活動は楽しい♪」、「でかいことを成し遂げたい！」などの様々な「思い」が存在している。一般的に大学間交流や FD に関する学会に参加すると「自大学の活動内容を紹介する」、「他大学の活動内容を聞く」という機会を得ることは多い。

しかし、本分科会では活動の結果としての「表面的な内容」ではなく、活動を行う上でのメンバー間の葛藤や衝突などの「思いのプロセス」に焦点を当てたこれまでにない分科会をやってみたいと考え、「それでも僕は考えたい 学生 FD の『思い』」というテーマに至った。



本分科会の趣旨 & 概要

趣旨

本分科会は、「参加大学の活動の質を向上させるきっかけにする」、「分科会を企画することで燦自身も活動のヒントを得る」という目的のもと実施した。

概要

本分科会では、「思い」という抽象的な事柄に着目し、少人数のグループワークを中心に構成・実施した。学生 FD に関する「思い」をグループ内で共有し、個人ベースで意見交換を行うことで、活動への活力につながるプログラム構成を意識した。また、ワーク前のアイスブレイクや個人ワーク、メッセージカードを取り入れて「思い」の共有をスムーズにし、自分の内面を振り返る機会を複数回設ける工夫をした。

本分科会の特徴

分科会を実施するにあたり、テーマに沿って数人の登壇者が話し、参加者と議論を行うという一般的な形式ではなく、個人ワークを重視する形式を取り入れた。ここでは、本分科会で工夫した点を紹介する。

少人数のグループワークを行う(3名/1グループ)

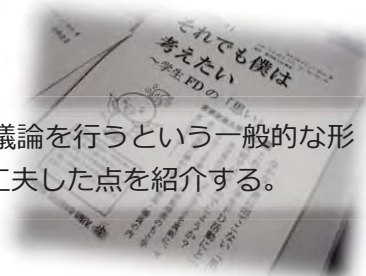
グループワークでは「『思い』の記述」と「共有」とともに少人数で時間をかけて行い、新たな発見をする機会を提供する。所属大学・団体が異なる参加者でグループを編成するために事前に座席指定を行う。

話しやすい環境作り

個人ワークの時間に BGM を流すなど、細かいところまで気を配ることを意識する。また会場全体を燦の運営スタッフ(サポーター)が見回り、議論の状況を見て声掛けを行うことで、ファシリテーターを置かないグループワークを実施する。

「明日から頑張ろう!」と感じてもらえる仕掛け作り

活動を続けていく上での「大切なもの」を見つけ、明日からの活力につなげてもらうため、グループのメンバーとメッセージカードを記入、交換する機会を提供する。





分科会のフローチャート

ここでは、分科会の流れと内容をフローチャートでまとめる。

(1) 分科会の 趣旨説明

学生FDに関する「思い」の具体例を挙げ、本分科会の趣旨、目標や形式などを参加者に説明した。

ワークの導入として、他大学の学生2名、燦の学生2名の思いを語る時間を設けた。

(2) 登壇者の「思い」

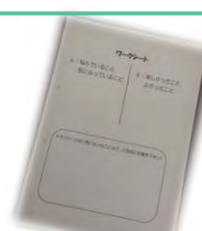
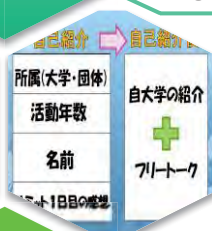


(3) グループワークの 流れとルール説明

参加者にテーマの設定意図を明確に伝え、細かいところまで気を配ることを意識しながら説明した。

各グループで自己紹介や自大学の活動紹介、フリートークを自由に行った。

(4) アイスブレイク <5分程度>



(5) 「思い」の記述 <10分>

参加者に対してワークシートに活動へのプラスとマイナスの「思い」を記述する時間を設けた。BGMを流し、個人で考えやすいような雰囲気作りを行った。

(5)で記述した「思い」をグループ内で話す時間を設けた。その際、全体にサポーターを数人置き、より活発なワークになるように工夫した。

(6) 「思い」の共有 <20分>



(7) 「思い」の振り返り <3分>

グループワークを受けてもう一度個人で考えを深める時間を設けた。BGMを流し、リラックスして考えることができるように工夫した。

グループワークのメンバーと自分の「思い」を振り返って気付いたことや、実際に話してみた感想の共有を行った。

(8) 感想の共有 <5分>



(9) メッセージカード の記入<10分>

グループワークでの気づきを「何か持って帰れるもの」として残すために参加者全員がグループのメンバーに対して自由にコメントを記入した。

最後にスライドショーとBGMを流し、各グループでメッセージカードの交換を行い、本分科会を終了した。

(10) エンディング・ メッセージカード の交換<5分>



まとめ

本分科会の目的は「**参加大学の活動の質を向上させるきっかけにすること**」そして「**この分科会を企画することで自分たちのヒントとすること**」である。

本分科会で実施したアンケート(N=80)によると、参加における満足度(5段階評価)の平均値は、学生 4.20、教員 4.67、職員 4.83 であった。また、「ワークを通じて自分を見つめ直すきっかけとなりましたか?」という質問についても、学生 93%、教員 100%、職員 100%と学生・教員・職員の三者から高い評価を得ることができた。このような結果がでた理由として、日常では話し合う機会のない参加者が、「**思い**」というテーマについて互いに話し合うことの新鮮さや刺激などが大きく反映されたと考えられる。

学生 FD 活動に関わる者に限らないが、大学の中で私たちは様々な感情を持ちながら、日々生活をしている。燦はそれぞれのメンバーが培ってきた知識やノウハウを活かす「情熱」や「感情」などの「思い」の重要性を感じていた。そこで、少人数で本格的なグループワークを行う今までにない分科会形式を採用した。

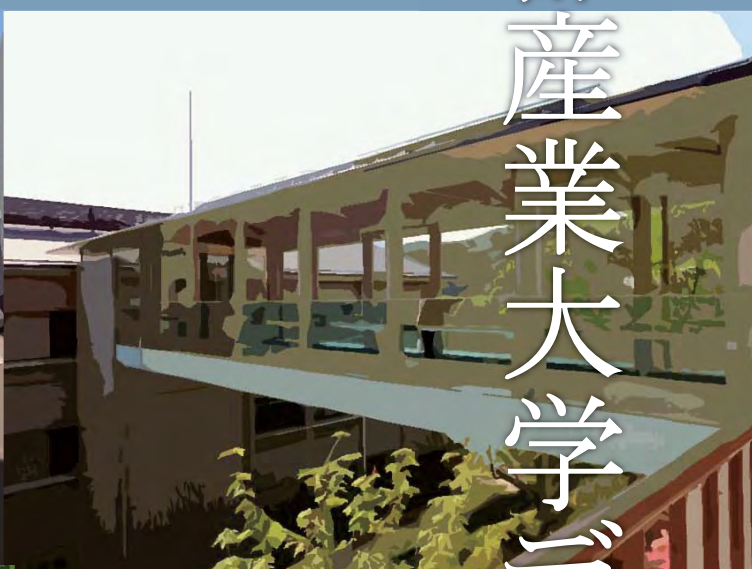


参加者の自由記述には、「関わっているスタッフの気持ちを言い合える場は今までになかったので、とても面白い企画だった」、「少人数で話すことで、より深く話をする事ができた」という学生や、「自由に話せる雰囲気作りがよかった」という職員の声があった。

また、「他大学の学生と FD について語り合うことで熱い何かをつかみ取ることができた」、「思いを三人で共有することによってモチベーションの上昇につながった」という学生や「自分自身がなぜ学生 FD に携わっているのかということを振り返る良い機会となった」という教員の声もあり、活動の中での喜びや悲しみ・不安といったあらゆる「思い」を共有することで、**参加者が互いに刺激を受け、活動の原動力へとつながるものを得ることができた**と考えられる。

「京都産業大学データ」

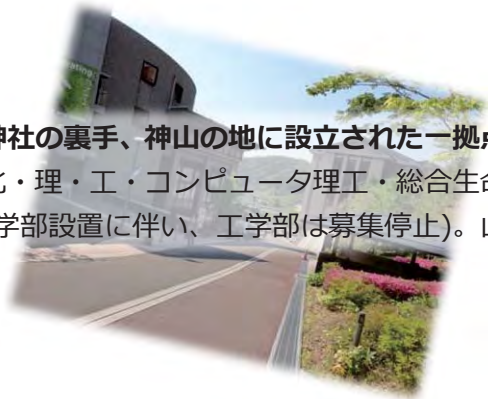
京都産業大学の学生数や学部の種類など、様々なデータを記述する。これらのデータを参照することで、これまでに紹介したイベントをより深く理解することができる。



2014 年 5 月 in 京都産業大学

京都産業大学ってどんなところ？

京都産業大学は、**1965 年に経済学部・理学部を有し、上賀茂神社の裏手、神山の地に設立された一拠点総合大学**である。2013 年現在、学部は経済・経営・法・外国語・文化・理・工・コンピュータ理工・総合生命科学の**計 9 学部**が存在している(コンピュータ理工学部・総合生命科学部設置に伴い、工学部は募集停止)。山の中に作られたキャンパスは、猿や鹿が出る自然豊かな大学だ。



どのくらいの人がいるの？

京都産業大学には 2013 年 5 月 1 日現在、**学部生 13,045 名、大学院生 206 名、教員 393 名、職員 434 名**の**計 14,078 名**が在籍している。学部生の内訳は、経済 2,768 名、経営 2,955 名、法 2,875 名、外国語 1,980 名、文化 942 名、理 419 名、工 19 名(工学部は 4 年次のみ)、コンピュータ理工 596 名、総合生命科学部 491 名である。

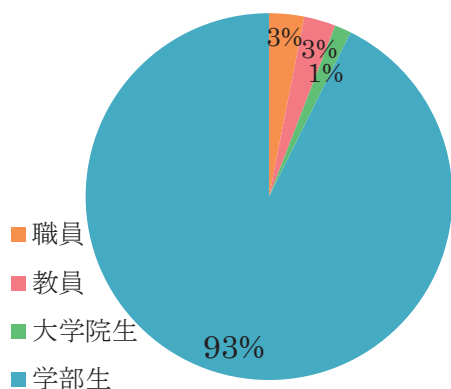
これを文系と理系に分類してみると、文系 5 学部計 11,520 名、理系 4 学部計 1,525 名で京都産業大学のうちおよそ**88%が文系の学生**ということになる。また、全学部のうち**女子学生は 3,920 名**で、割合としては約 30%を占めている。

因みに、キャンパス内の人口密度は約 0.023 [人/m²] であり、およそ 43.4[m²]に 1 人存在していることになる。これが**モナコの人口密度と大体等しい**ということは全く知られていない。

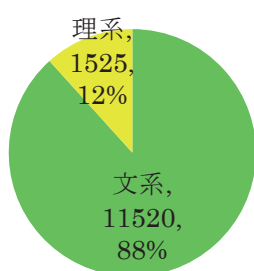


教員・職員・大学院生・学部生の

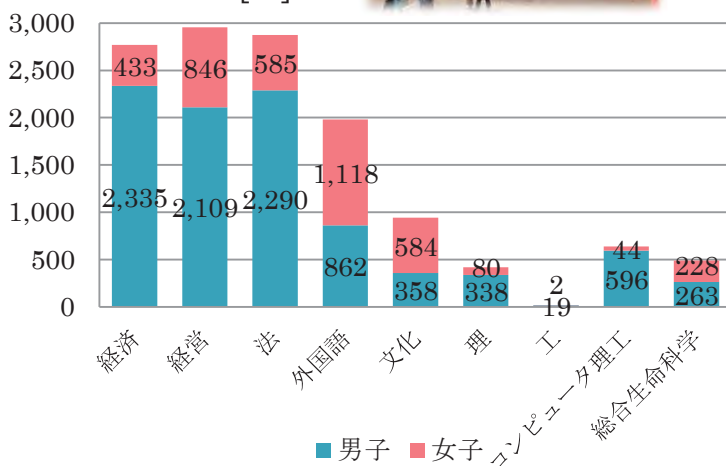
人員構成比[人]



学部生の内訳



各学部生の人数 [人]



キャンパスの広さは？

京都産業大学の**敷地面積は 611,353[m²]**。これは東京ドーム 13 個分の広大な面積である。因みに JR 京都駅ビルで例えると、16 個分となっている。





YouTube で 動画配信中！！

「AC 燦 活動紹介プレゼンテーション」
(コンソーシアム京都主催 第18回FDフォーラム)

映像でご覧になりたい方は、「燦.ch」で
検索またはQRコードを読み込んでください！



「教職員と学生の
理想の関わり方とは？」

「緊急記者会見」
(学生FDサミット2012 冬)



SUN ちゃんって??

AC 爆のマスコットキャラクター、SUN ちゃんは
爆々と輝く太陽(SUN)から生まれた鳳凰の赤
 ちゃんです。

照れ屋でちょいドジ、
 将来の夢は**名ファシリテーター**に
 なること

たてがみと羽は**炎**でできています
 (たまに自分でもヤケドします)

身長:33.3cm

体重:3.3kg

誕生日:6月27日

(**爆**の結成記念日)



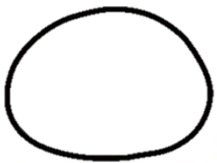
オスでもメスでも **ありません**

カラータイツを集めています
 (今年のトレンドはボーダー!?)

SUN ちゃんのえかきうた

みんなでSUNちゃんを
 描いてみよう!!

1



さんかくおにぎり
 塩にぎり

2



目は うめぼしと

3



塩こんぶ

4



ついでに たらこも
 入れましょう

5



火で あぶって

6



けむりが 出たら

7



できあがり!!



最後に…

叫びたくなったときも、徹夜で作業しているときも、
やけにハイテンションなときも…

いつまで経っても、何があっても、変わらないものがある。

それは今しかできないこと、

大人になったら手に入らないもの。

そんなものをつくりたかった。

つくりたかったから、つくった。

「アホなことを真剣に、マジメなことを楽しく。」



We want to make this
world colorful.

AC 燦データブック製作メンバー一同



AC 燦 共創データブックⅡ

第1号

平成26年6月13日(2014年6月13日)発行

乙倉孝臣(経済4)・竹谷美里(経営3)

若宮健(総合生命科3)・遠藤愛子(総合生命科3)・田村玖美(経営2)・

発行者 AC 燦データブック製作メンバー

(実践事例)

学生FDサミット2013年夏 分科会開催報告
—それでも僕は考えたい 学生FDの「思い」—

若宮 健・乙倉 孝臣・越山 沙紀・坂本 由香
竹谷 美里・中沢 正江・森脇 可奈子

高等教育フォーラム 第4号抜刷 平成26年3月

学生FDサミット2013年夏分科会開催報告 —それでも僕は考えたい 学生FDの「思い」—

若宮 健¹・乙倉 孝臣²・越山 沙紀¹・坂本 由香³・竹谷 美里⁴・中澤 正江⁵・森脇 可奈子⁵

FD活動、特に学生FD活動において、FDに関わる個々人のFD活動への思いは非常に大切であり、メンバー間や教職員との思いのぶつけ合いによって活動を成功させることができる。そう考えると、各大学の学生FD活動を推進させている要因として「思い」に着目し、FD活動の質の向上につなげることは有意義ではないだろうか。本稿では、京都産業大学学生FDスタッフ燦が取組んだ学生FDサミット2013夏での分科会「それでも僕らは考えたい 学生FDの『思い』」について報告する。

キーワード: 学生FD、個々の思い、分科会の構成手法、大学共創

1. はじめに

学生FDのサミットや大学間交流会、学会では、「自大学の活動内容を紹介する」、「他大学の活動内容を聞く」ことが多い。そのような場での情報交換は自大学の活動の見直しや新たな取り組みを行うにあたって非常に重要である。しかし一方で、他大学メンバーとの実際のやりとりを思うと、表面的で何か物足りなさを覚えることも多い。

学生FDサミット2013夏で京都産業大学学生FDスタッフ燦¹⁾が分科会を担当するにあたって燦ではどうすれば分科会などのイベントで参加者がもっと深みのある議論をできるのかについて議論した。そこで私たちは、今までの発表やパネルディスカッション形式の一般的な分科会では、それぞれの団体に所属しているメンバーの深い気持ちを知ることができない点に注目した。私たちが活動をする上で重要な率直な「思い」、「熱意」そして「プロセス」は表面化しにくい。特に「思い」のような属人的なことに着目したところで、明日からの活動の一体何に貢献するのかと思いがちだ。しかし学生FDスタッフの活動は、「授業をよくしたい」、「こんなことを実現したい」というような思いが非常に大切であり、さらにメンバー間や教職員との思いのぶつけ合いがあるからこそ活動を成功させることができる。燦では、このような議論を通じて、「思いのぶつけ合い」が、学生FD活動の根幹を成しているのではないかと再認識するようになった。そして各大学の学生FD活動を推進させている要因として「思い」に着目

することは意義深いことではないだろうか。このような考えから、学生FDに関わる人々の「思い」に焦点を当てるといふこれまでにない分科会をやってみたいと考えた。

更にこの分科会には、現在の燦の活動を見直すきっかけにしたいというねらいもあった。燦では新しく加入したメンバーと以前から活動しているメンバーの間には、活動への馴染みややささや理解度・経験量が異なるために活動に対する認識のズレが生じるなどの問題があった。燦は2011年の結成以来、3年を経て、「授業改善がしたい」、「みんなで何かを創り上げたい」などの思いのほかに、「FDはよくわからないが燦が好きだから所属している」など多様な「思い」がメンバーの中にあることが浮き彫りになってきた。いま学生FDは世代交代の時期を迎えており、このような現状に直面することは決して燦に限ったことではないだろう。「思い」について真剣に考える場を提供することは、学生FD関係者にとって有意義だと考えた。

これらの考えから、「それでも僕は考えたい 学生FDの『思い』」という燦主催の分科会が生まれた。明日からのFD活動に具体的にはいかにも役に立たなそうな、抽象的な事柄である「思い」に敢えて焦点を当てたことから、分科会タイトルには「それでも」という前置きをつけている。

燦は当初より、この分科会の参加者に発見と感動を与えたいと考えていた。今までにない手法で「思い」に焦点を当てた分科会を開催することで、参加者が新たな視点

¹京都産業大学 総合生命科学部2年次、²京都産業大学 経済学部3年次、³京都産業大学 法学部2年次、⁴京都産業大学 経営学部2年次、⁵京都産業大学 学長室

実践事例

や発想を得て、学生FD活動全体を刺激・活性化し、参加大学の活動の質を向上させるきっかけにすること、またイベント内容を企画することで燦自身もヒントを得ることを目的として分科会は企画された。

本稿では、まず「1. はじめに」で、分科会「それでも僕は考えたい 学生FDの『思い』」の着想に至った経緯について述べた。続く「2. 分科会の特徴と構成」で、この分科会の概要、特徴、構成概要について述べる。「3. イベント構成の意図と運営」では、「2.」で述べた分科会の構成について、各構成の意図と、運営方法、また運営によって得られた知見について述べる。「4. 本分科会の意義と効果」では、質問票調査の結果分析を行い、本分科会の意義と効果について考察する。最後に、「5. まとめ」にて、本稿を総括する。

2. 分科会の特徴と構成

本章では、分科会の概要について触れた後、分科会の特徴と構成について述べる。

2.1. 分科会概要

タイトル: それでも僕は考えたい 学生FDの「思い」

日時: 2013年8月25日(日) 13:10-14:40

場所: 立命館大学 衣笠キャンパス

参加者数: 80名(ただし質問票記入者数)

主催: 京都産業大学AC燦

2.2. 分科会の特徴

- ① 参加者が単純に自大学の活動の報告・質疑応答を行うような一般的な分科会形式を採用せず、少人数で本格的なグループワークを行う(3名/グループ)。
- ② 自由な発言や思考・発想を許容できる環境を提供し、参加者個人がFD活動を通してどのような思いを持っているかを発見する機会を提供する。
- ③ 参加者に「活動をする上での活力」、つまりFD活動を続けていく上での「大切なもの」を見つけてもらい、「明日から頑張ろう!」と感じてもらえる仕掛け作りをプログラム全体で目指した。

2.3. 構成

分科会は次のような流れで実施された。

- (a) 分科会趣旨説明
- (b) 登壇者の「思い」
- (c) グループワークの流れとルール説明
- (d) アイスブレイク〈5分程度〉

- (e) 「思い」の記述〈10分〉
- (f) 「思い」の共有〈20分〉
- (g) 「思い」の振り返り〈3分〉
- (h) 感想の共有〈5分〉
- (i) メッセージカード記入〈10分〉
- (j) エンディング・メッセージカード交換

3. イベント構成の意図と運営

本章では、「2.」で述べたイベント構成に沿って各構成の意図と運営によって得られた知見について報告する。

3.1. 受付

今回の分科会では座席票を配布して、座席指定を行うことで、スムーズに十分なワークスペースを確保した動員が可能となった。また、所属大学が異なる方がどんな話題でも話しやすいため、参加者の所属大学に偏りが出ないように受付時に気を配った。

3.2. 分科会趣旨説明

一般的な分科会では数名の登壇者(パネラー)を得たパネルディスカッション形式が基本であるが、今回の分科会は参加者共通の話題である学生FDへの率直な「思い」をテーマとした。私たちは「思い」を引き出すためには、少人数でじっくり話すグループワークを行うことが有効であり、既存の分科会形式を崩すことで柔軟で新しい雰囲気醸成をすることができると考えた。実際に完成したプログラムには、既存の分科会形式とは異なる点が多数存在している。このような取組は燦としても初めてであるため、冒頭で多少無責任ではあるがどのような結果になるのか予想がついてないことを正直に告白し、参加者の協力を促した。次に、テーマとしてよく取り上げられる「大学をより良くする為の具体的な取組」、「学生FDの結びつきを強くする為の具体的な取組」、「学生FDを起ち上げるための具体的な取組」などはFD活動においてとても重要であることを確認した。その上で、学生FDに関わる、特に学生がよく口にしている「思い」の具体例を挙げ、「思い」の種類は非常に多様であること、および「思い」について考えることの重要性を参加者に説明した。最後にこの分科会の目標を参加者に明確に伝え、違和感なく、趣旨と形式を理解していただけるように工夫した。

3.3. 登壇者の「思い」

企画時に事前に行ったワークの練習では、「突然、『思い』についてのワークを始めましょうと言われても、何を

実践事例

考えたらいいいのかわからない」という感想が多く見られた。そこで、ワークを始める前に数名の参加者に自分の思いを語ってもらうことで、参加者に多様な視点から考えるヒントを提供するとともに、気軽に何でも話してもいいというワークに入りやすい雰囲気作りをしたいと考え、本学及び他大学の学生FDスタッフ合わせて4名の登壇者に自分の思いを語っていただくことにした(図1. 参照)。登壇は、活動歴の短い学生の事例として燦の1年次・矢野享佑(活動歴約2ヶ月)、学生FDサミットというイベントを主催する側の事例として立命館大学の3年次・森本拓暢さん(活動歴約1年・留学期間を除く)、活動歴の長いベテラン学生の事例として追手門学院大学の4年次・大木優衣さん、燦の4年次・林隆二が担当した。

このとき、登壇者に対し、それぞれの「思い」について、良い面も悪い面も忌憚なく表現するよう依頼した。これにより、参加者にとって、ワークに入り込みやすい環境を作り出すことができ、その後のワークが円滑に進んだと考えられる。



図1. 「思い」を語る登壇者

3.4. グループワークの流れとルール説明

企画段階からワークが長く感じないか、ファシリテーターがいないことによる時間配分やペース作りの難しさ、「思い」は人それぞれだから間違いはない、言いたくない「思い」もあるのではないかと、FDをやっていない場合にはどうするのかという懸念が浮上していた。

これらを解消するために、主催者側の意図を明確に伝え、細かいところまで気を配ることを意識しながら説明を行った。

3.5. アイスブレイク

「思い」について本音を語り合うためには、アイスブレイクが重要である。学生FDサミットの参加者には名札が配布されていたため、それを用いた自己紹介を各グループで行っていただいた。もし時間が余れば、自大学の活動紹介やフリートークを自由に行っていただくことにした。このパートにより、後の「思い」の共有をスムーズにすることができた。

3.6. 「思い」の記述

プラスとマイナスの2種類の思いをワークシートに書く時間を別々に設けた。あとからプラスの部分を書いた方が後味はいいという点から、マイナス・プラスの順で考えてもらい、晴れやかな気分でのワークに進んでもらった。

この時、参加者には他人と話すのではなく1人で考える時間にしてほしかったため、また考えやすいような雰囲気を提供するため、歌詞の入っていないBGMを流した。

3.7. 「思い」の共有

前述の2種類の思いを話す時間を別々に設けた。本格的なグループワークのスタートである。今回は、グループ数が非常に多く、全てのグループに燦のファシリテーターを置くことが困難であったため、全体にサポーターを数人置くことで、話しが滞っているグループをより円滑なワークへ転換するように試みた。サポーターが全体の雰囲気作りに寄与した効果は大きいと考えられる。実際にアンケートで、「〇〇さん、話を聞いてくださり、ありがとうございます。」というようなコメントも見られた。



図2. グループでの「思い」の共有

実践事例

一方で、参加者自らがワークを進めていけるプログラムに構成したため、多くのグループでは活発な話し合いが行われていた(図2. 参照)。

3.8. 「思い」の振り返り

グループワークで話して終わるのではなく、その思いがどういったことなのかを、もう一度自分の中で考える時間が作れたかった。ここでは参加者に個人ワークに徹していただきたかったため、再度歌詞の入っていない静かなBGMを流し、リラックスしながら考える時間とすることを意識した。

3.9. 感想の共有

グループワークの最後に、各自が自分の「思い」を振り返って気付いたことを含めた情報の共有、およびグループワークで実際に話してみた感想の共有を目的として話し合っていた。

3.10. メッセージカード記入

一般的にグループワークでは、前述した感想の共有で終了するのがほとんどだろう。ここで、私たちは「何か持って帰れるもの」を形にすることが、私たちがこの分科会の目的とした「参加者がFD活動をする上での活力」につながると考えた。この発想から誕生したのがメッセージカードである(図3. 参照)。参加者全員に話し合ったメンバーに対して自由にメッセージカードを記入していただいた。参加者からの評価も上々であり、よい思い出になったようである。

また、カード裏面には、日付や分科会名等を記載したことで、本分科会参加の記念となるように工夫した。

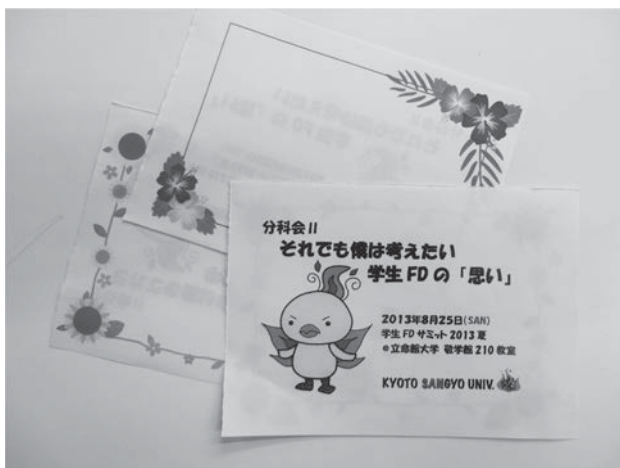


図3. メッセージカード

3.11. エンディング&メッセージカード交換

燦が日頃から意識している理念は「アホなことを真剣に、マジメなことを楽しく。」である。「最後には感動をもたらしたい」と考え、分科会前日に撮影したサミットにおける他大学のポスターセッションや全体会でのスナップ写真(本分科会参加者を含む)で作成したスライドショーを準備し、照明を落としたうえで静かなBGMとともに流し、メンバーの一人がまとめのスピーチをするというサプライズを用意した(図4. 参照)。最後に参加者がメッセージカードの交換を行い、燦主催の分科会はこれにより完成に至った。



図4. エンディングの工夫

以上が、本分科会の各プロセスの意図と運営、またそれによって得られた知見である。

続く「4. 本分科会の意義と効果」では、このような構成で実施された本分科会について、参加者や燦にとって、どのような意義・効果が見られたのかについて報告する。

4. 本分科会の意義と効果

本分科会の意義と効果を把握するため、分科会では質問票調査を実施した。

量的調査部分の結果をまとめたものが、表1である。

参加者全員に、イベントの満足度を「この分科会に参加してみようでしたか? どれか一つに○を付けて下さい。」という形で質問を実施し、「5. とてもよかった」～「1. とても悪かった」の5段階での評価を求めた。表1「満足度」は、この値の平均値である。イベントの効果を実感したかどうかを把握するためには、「ワークを通じて自分を見つめ直すきっかけとなりましたか?」という質問を実施し、「1. なった」と「0. ならなかった」の2値での評価

実践事例

を求めた。表1の「効果実感」は「1」が選択された割合である。

表1. 本分科会の満足度と効果実感

	満足度	効果実感
学生(N=71)	4.20	93.0%
教員(N= 3)	4.67	100.0%
職員(N= 6)	4.83	100.0%

表1より、満足度、効果実感ともに学生・教員・職員の三者から高い評価を得た。このような結果が出た理由として、日常では話し合う機会の少ない三者が、「思い」というテーマについて互いに話し合うことの新鮮さや刺激などが大きく反映されたと考えられる。

自由記述に関しては、「関わっているスタッフの気持ちを言い合える場は今までになかったので、とても面白い企画だった」、「少人数で話すことで、より深く話をする事ができた」という学生や「自由に話せる雰囲気作りがよかった」という職員の声があり、座席指定や少人数で本格的なグループワークを行う今までにはない形式の分科会を採用したことで、初対面ではあるものの、本音で語り合えるような場を提供できた。また、「他大学の学生とFDについて語り合うことで熱い何かをつかみ取ることができた」、「思いを三人で共有することによってモチベーションの上昇につながった」という学生や「自分自身がなぜ学生FDに携わっているのかということ振り返る良い機会となった」という教員の声もあり、活動の中での喜び・悲しみ・不安などあらゆる「思い」を共有することで、互いに刺激を受け、参加者にこれからの活動の原動力へとつながるものを得てもらうことができた。これらのことから本分科会は、燦が狙いとした意図通りの結果となり、非常に意義のあるものとなった。

新しく加入した燦のメンバーにとっては初めての大きなイベントで、それぞれ不安もあったが、グループワークを行う参加者たちの笑顔や楽しそうな様子、感動する様子を見て、「初めは何かよくわからなかったけれど、この分科会に行ってよかった」、「主催者側の自分たちも明日からがんばろうと思えた」など本分科会をきっかけに新たな何かを発見した。この経験は、成長へつながるとともに燦のメンバー間の認識のズレを縮め、本分科会の実施は燦にとってとても納得のいくものになった。

本分科会で企画側として最大限に気を配ったことは、どれだけ共感を得られるプログラムにできるかであった。終了後に回収したアンケートでは多くの参加者から賞賛

の声をいただき、共感を得られるプログラムになったと推測できる。その要因として自由記述欄には、BGMを流した等の演出および「思い」に焦点を当てたテーマ自体がよかったとの記述が目立った。これらの反響から、本分科会では、学生FD活動が多様化する中で参加者が「共通の話題」で話し合うことができたのだと推定でき、運営面で「新しい分科会形式の確立」が期待できる。

また、ワーク中に使用したパワーポイントや配布物等の活躍は大きく、当日の運営に携わったメンバーだけではなく、燦のメンバー全員で創り上げた分科会となったことは間違いない。

5. まとめ

この分科会の目的は大きく分けて2つあった。「参加大学、自大学の活動の質を向上させるきっかけにすること」、そして「この分科会を企画することで自分たちのヒントとすること」である。

「思い」という抽象的な事柄に着目し、本格的なグループワークをメインとした構成の分科会を考案し、実施したことにより、4で述べたように、「構成」、「演出」、「テーマ」について、それぞれ参加者から期待以上の評価を得た。

本分科会では、FDというのがよくわからない、自分が何をすればいいのかわからないなどの不安を抱えていた燦の新メンバーにとっては、運営に携わることで、たくさんの人の笑顔や喜びを実際に目で見える機会にもなった。この経験はこれから活動をしていく上でプラスになり、具体的な行動につながっていく原動力となるだろう。どのような行動に移すのかは人それぞれであるが、少なくとも自分自身がFDスタッフであることに対して自信を持つことができたのではないだろうか。活動歴の長かったメンバーにとっても、自分の考えを見つめ直し、原点に帰って考え直すことができたと考えられる。本分科会は燦という組織にとっても、新たな成長を得られた点で非常に意義があったと言える。

最後に、この分科会の趣旨を振り返りながら、本分科会の目的が達成されたのかを、もう一度吟味する。

分科会の趣旨説明で、私たちは学生FD活動に関わる学生がよく口にする「思い」の具体例として、次のようなものを挙げた。

- ・FDはよくわからないけれど、活動は楽しい
- ・せっかくきたのに、やることないの？
- ・忙しい
- ・何か「でかいこと」を成し遂げてみたい

FD活動に関わる者に限らないが、大学の中で、我々は

様々な感情を持ちながら、日々生活をしている。しかしFD活動に関わる者は時に「FDとは何か」、「どのようにすれば成功するのか」などの知識・ノウハウの前に、それらの知識・ノウハウを活かす活動の源泉となる「情熱」や「感情」つまり、「思い」を忘れがちではないかと、燦は感じていた。一般的な分科会形式への抵抗感もこの現れといえる。燦のこれまでの学生FDサミットやコンソーシアム京都主催のFDフォーラムでの発表²⁾は、全てその意味では、「参加者に刺激を与えることで(時に参加者から『刺激が強すぎたのでは』と言わしめる程に)、各人の活動の源泉『思い』に立ち返って欲しい」という願いが込められたものと捉え直すことができる。これは、「その人らしい大学での過ごし方(仕事／本分)を取り戻して欲しい」との願いであり、言い換えれば、燦の活動目標である「大学を構成するもの全てを笑顔にしたい」という願いに直結している。

このように考えてみれば、燦にとっての組織改善・大学改善とは、「そのような構成員の、大学における自由な振る舞いをいかに許容できるようにすることができるか」を意味していると言える。

本分科会の取組は、(他大学も含め)大学を構成する者に、それぞれの『思い』を思い出させ、それを周囲の参加者(基本的には他大学のFDの事情を知る者)と交換し、許容し合うというプロセスを提供した。

このプロセスでは、愚痴のようなネガティブな思いも、突拍子もない野望のような思いも忌憚なく交換された。そして、参加者の多く(学生93%、教職員100%)は、そのことによって今後の活動や自身について考えるきっかけを得た。質問票の自由記述では「自分は先輩が怖いから(学生FDを)続けているだけだということが分かった」というような、本来の自分に改めて気づき、立ち返るような胸中の吐露もみる事ができ、思った以上に参加者が自身の内面を深く振り返っていることも確認されている。

これらの結果から、このような「思い」の交換というプロセスは、主催者である燦の意図通りあるいは想定以上に参加者に機能したと言える。

大学は、「生きていく上で、学ばなければいけないことを、仕方なく学ぶ」という場ではない。また大学の学びはコースワークだけで作られているわけではない。自分の中に眠る、『思い』に素直に従って、より良いもの(経験・知識)を得ることも大学で学ぶ意味である。授業に出て、合間にディスカッションをして、家で授業の課題をするか、メンバーとスカイプで話しながら資料を作る。そんな慌ただしい毎日の中で、「思い」がなかったら、一体誰が

「もっと前へ進みたい」、「もっとクオリティの高いことがしたい」などと思うだろうか。

大学は、「誰もみたことがないものをみたい」、「誰も知らないことを知りたい」、「誰も参加したことのないようなイベントをつくりたい」というような構成員のチャレンジに応える場であり、そこではもっと多くのチャレンジに大学が応えられるように構成員である学生・教員・職員が力を合わせて環境を改善していくことが望ましいはずである。

そのために最も必要で、原初となる前提は何か。それは、なによりも、大学を構成するものが、「やりたい」、「やりたいことをやっている」という「思い」を持っていることだと、この分科会に参加した学生・教員・職員の「思い」に触れ、我々も改めて気付かされた。

分科会でのこのような気づきから、2013年11月に実施した学内イベント「京産共創プロジェクトⅢ」では、「単位の意味と授業の価値」「大学における時間の過ごし方」といったネガティブな意見や対立意見が出やすいトピックをあえてテーマの中心に据え、学生・教職員間で互いに自由な意見を許容しあうことを試みた。この成果については、現在、グループワークで得られた付箋データや共創シートと呼ぶ質問紙調査の結果をとりまとめ中であり、後に別稿にて報告する予定である。

謝辞

本分科会の登壇について、突然の依頼にも関わらず快く引き受けて下さった立命館大学の森本拓暢さん、追手門学院大学の太木優衣さんに、心より感謝の意を表します。

いつも共に、刺激を与え合い、「アホなことを真剣に」全力で創りあげている燦のメンバー全員に、とりわけ本稿の作成においては、質問票データの集計を担当した遠藤愛子、徳田義貴、神谷諒に感謝します。

注

- 1) Academe Co-Creating Committee (大学共創委員会) 燦(SAN)は、愛称として「燦」または「AC燦」と呼ばれている、京都産業大学の学生FDスタッフ組織のことを指す。
- 2) 燦は、コンソーシアム京都主催の第18回FDフォーラム(2013年2月22日(土)、23(日)立命館大学衣笠キャンパスで実施)のシンポジウム②「学生とともにすすめるFD」で型破りな劇調の活動紹介を行った。

A Session Report on Our Thoughts towards Student-initiated Faculty Development

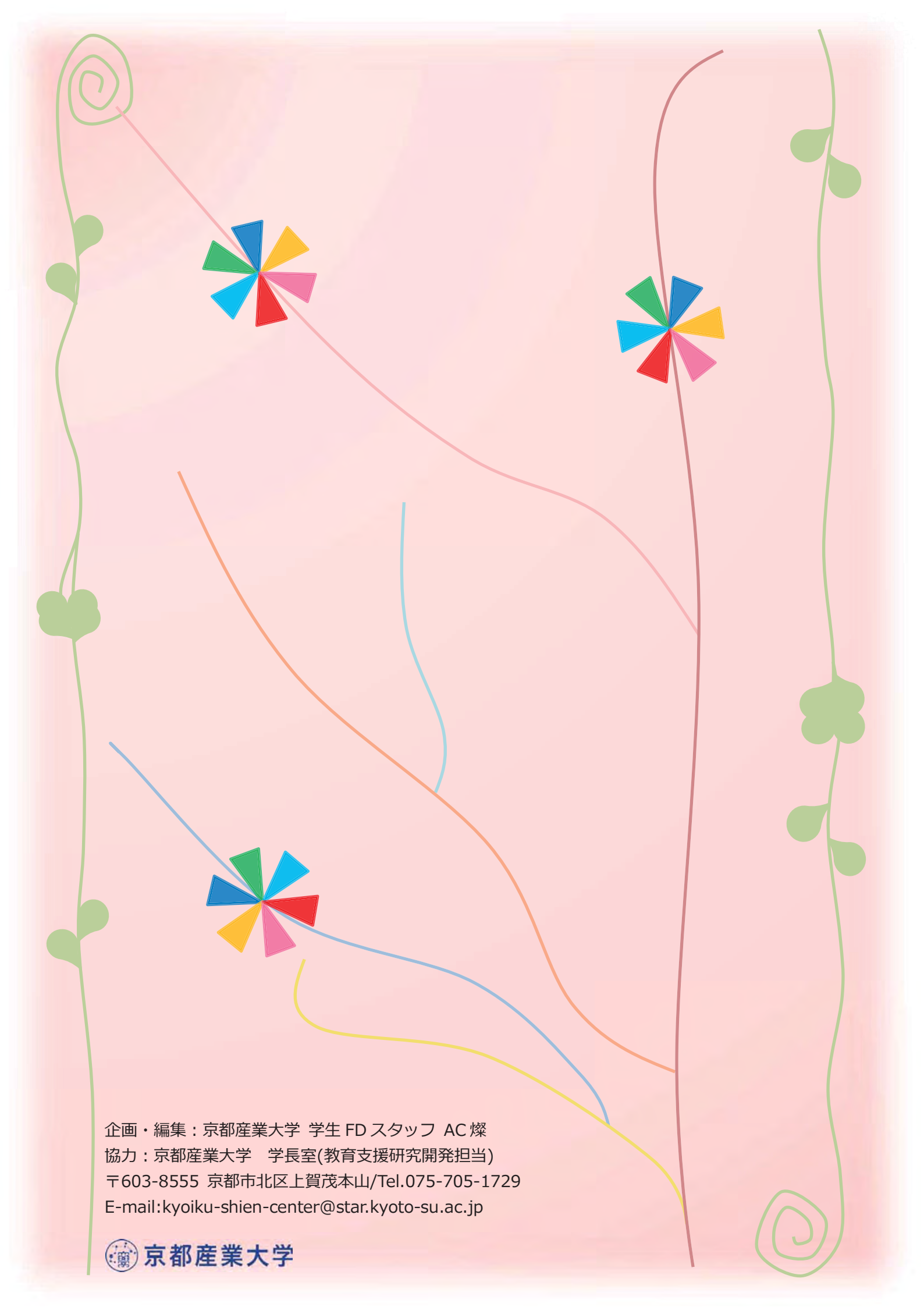
Takeshi WAKAMIYA¹, Takaomi OTOKURA²,
Saki KOSHIYAMA¹, Yuka SAKAMOTO³,
Misato TAKETANI⁴, Masae NAKASAWA⁵,
Kanao MORIWAKI⁵

In implementing faculty development (FD) activities at a university, especially for the student-initiated FD activities, the individual thoughts of those who participate in the activities are very important. Successful FD activities are only brought through exchanges and negotiations of thoughts among the members including students participating in the FD activities, faculty members, and administrative staff. In this regard, we consider it meaningful to focus on individual thoughts as enabling factors to promote effective FD activities. This article reports FD activities of the Kyoto Sangyo University's Students' FD Association, *SAN*, and the design and results of our session entitled, 'We Dare to Think of It: Our Thoughts Towards Student-initiated FD Activities' held at the *Student-initiated Faculty Development Summit in 2013 Summer*.

KEYWORDS: Student-initiated Faculty Development, Individual Thoughts, Session Development, Academe Co-creating

2013年11月29日受理

¹Faculty of Life Science, ²Faculty of Economics, ³Faculty of Law,
⁴Faculty of Business Administration, ⁵Center of Presidential Affairs



企画・編集：京都産業大学 学生 FD スタッフ AC 燦
協力：京都産業大学 学長室(教育支援研究開発担当)
〒603-8555 京都市北区上賀茂本山/Tel.075-705-1729
E-mail:kyoiku-shien-center@star.kyoto-su.ac.jp



京都産業大学